

5. ポイントロボスの採鮑業と鮑缶詰会社

地場産業として地元が期待を寄せている鮑缶詰工場のことでは、『サイプレス』紙（11月4日付）にゲイエッティ兄弟が缶詰工場建築の木材を購入することや、1ヶ月後には工場の操業を開始との記事が出るとともに、12月23日付記事に年明けに鮑缶詰工場を操業すると記載された。

こうして1900（明治33）年1月頃には、ゲイエッティ兄弟会社の缶詰工場が完成し、オークランドからモントレイに缶詰会社に移転することになった。

その年の2月には井出商会水産部による器械式潜水具使用の採鮑業のため、七浦村千田より海士7名（在原良之助・鈴木治郎松・高橋春治・早川音治郎・山本林治・山本梅吉・渡辺勘治）がポイントロボスに到着している。『サンフランシスコ・コール』紙（2月6日付）には、ゲイエッティ兄弟会社の鮑缶詰工場が今週操業を開始するが、採鮑のための潜水夫は日本人でなく白人を雇うと会社が発表したとの記事が掲載され、「潜水夫は日本人でなく白人を雇う」ということになると、白人の潜水夫グループがポイントロボスでも存在していたのであろうか。『イブニング・センチネル』紙（2月28日付）には、「鮑缶詰工場」と題して「ゲイエッティ支配人によると、海岸にある鮑缶詰工場は第一級品として稼働しているが、まだフル稼働していないとのことだ。木曜日に2000個の缶詰がここから出荷された。地元の店で販売するため、数ケースが町に残された」との記事が掲載された。この頃の井出商会水産部が採鮑業、なかでも乾鮑製造以外に鮑缶詰製造をおこなっていたかどうかの資料がなく不明のままである。ゲイエッティ兄弟会社が缶詰製造を始めたなかで、井出商会水産部が缶詰事業で対抗するとは思われない。また、モントレイやカーメル地域で他に採鮑業者たちの動きはわからないが、何らかの事態が起こって井出商会水産部はポイントロボスから撤退することになった。

その理由はどこにあったか他の資料からみると、これまで『続・源流』の「6. 野田音三郎や井出百太郎、森俊肇」でも述べたように、「井出と野田はモントレイでの豊富な鮑をみて、缶詰や乾鮑の輸出構想をもった。小谷兄弟や海士が現地到着後、モントレイでの野田音三郎による採鮑が始まり、その後井出商会水産部がモントレイか、ポイントロボスで素もぐりによる採鮑業と乾鮑加工をおこなっていく。書簡類の日付からみて、1898（明治31）年9月頃、井出商会水産部が器械式潜水による採鮑漁を導入…器械式潜水による採鮑漁や乾鮑製造についての知識・技能がなかったので、長続きせず経営が不振となって共同経営を解消…資金のことや鮑資源保護ためとされた採鮑漁禁止運動に対抗できず、結局撤退して、小谷兄弟がポイントロボスで受け継いでいった」とした。なかでも野田の缶詰製造事業では「野田がマルバスと共同して鮭と鮑の缶詰製造のため、モントレイ水産缶詰会社を設立したのは1902（明治35）年のことで、モントレイでは初期に設立された缶詰会社」であったと述べてきた。乾鮑製造・販売の不安定さや缶詰製造事業の参入など、資金の面が火種となって井出と野田は対立し、結局分裂していったのではないか。その火種は井出商会になっても続き、1900（明治33）年9月、森俊肇が経営する森合名会社が井出商会から鮑事業を引き継いでいった。その後の動きでは森合名会社が乾鮑製造・販売だけでなく缶詰製造事業にも取り組んでいったと思われる。

ところで建築家A. M. アーレンや源之助らの動きをみると、1900年はロサンゼルススのワシントン・メイン地区にウォーターパークなどレジャー施設的设计・公園の建設に関わり、小谷源之助はカリフォルニア大学バークレー校とともにポイントロボスの共同調査をおこなったという。翌年2月、アーレンはロサンゼルススのレジャー施設が好評を得て成功したこともあり、夏のリゾート地としてポイントロボスを整備していく構想を考えた時期であった。同時にポイントロボスにおいて小

谷源之助・仲治郎らと共同して採鮑事業に取り組んでいく。(冊子『ポイントロボス』器械式潜水による採鮑業)

1901(明治34)年7月になると、『パシフィック・グローブ・レビュー』紙(7月13日付)から転載して『サイプレス』紙(7月20日付)は、論評「鮑は腐った」という記事を掲載した。「日本人の資本による鮑漁業がポイントロボスの近くでおこなわれたが、これは非常に悲惨な事業になった。この会社はダイバーを雇い、カーメル湾の岩礁から何トンもの鮑を採取し乾燥させ、食用として日本に輸送したが、鮑から水分をすべて除去したはずなのに、船に詰め込むと加熱により腐敗してしまった。あまりの損失の大きさに会社は解散し、海岸のさらに奥にある缶詰工場を経営するゲイエッティ兄弟会社に全製造機械が売却された」という内容で、それは森俊肇が経営する森合名会社のことであった。この乾鮑輸送の失敗で森合名会社はポイントロボスから撤退することとなり、缶詰工場の製造機械はすべてゲイエッティ兄弟会社に売却したのであった。

ゲイエッティ兄弟会社に渡った森合名会社の缶詰製造機械は、そのままポイントロボスに置かれ、その後A. M. アーレン(40歳)が買い取り、小谷源之助(32歳)とともに共同してポイントロボス缶詰会社(Point Lobos Canning Company)の開業となっていたという。そうすると設立は1901(明治34)年になる。

しかし、1902(明治35)年の『エラ』紙(2月19日付)には、小谷源之助とA. M. アーレンが共同経営するポイントロボス缶詰会社の工場への缶詰製造機械が、今週到着し現在準備中という記事が掲載されている。このことは工場稼働のため追加の製造機械を買うことになり、実際の缶詰工場の操業は1902(明治35)年になったのではないか。この『エラ』紙(2月19日付)をみると、廃業したポイントロボスの鮑缶詰工場の製造機械は、サンペドロに輸送予定との記載もあったので、森合名会社の缶詰製造機械は、ゲイエッティ兄弟会社に売却されたものの、買い取ったアーレンはポイントロボスの工場だけでなく、新設のカユコス工場に設置する予定であったと思われる。

これまで『アーレン伝』の記載が1899(明治32)年を設立年としているのは、資金を調達していたA. M. アーレンと、採鮑する器械式潜水夫たちのリーダー小谷源之助と仲治郎が、ポイントロボス缶詰会社を共同経営することに合意し契約したからではないか。その後、採鮑業規制条例や排日運動が強まっていく状況のもと、缶詰工場への製造機械の設置や実際の操業にむけて紆余曲折があったなかで、アーレンと小谷兄弟はパートナーシップを育みながら、鮑缶詰工場の操業に漕ぎ着けた。この1902(明治35)年をスタートとする共同経営の取り組みは、カリフォルニアの鮑市場の75%を占める主要な商業鮑漁会社に成長していったのである。

翌03(明治36)年に入って『エラ』紙(1月21日付)は、ゲイエッティ兄弟がポート・ハーフォードで缶詰工場を開業したとの記事を掲載するとともに、『モーニング・トリビューン』紙(2月15日付)には、カユコスの缶詰工場が稼働し、その後、ポート・ハーフォードで鮑缶詰工場建設の土地取得の契約が結ばれたとあり、ゲイエッティ兄弟が鮑缶詰生産を拡大できるのも、鮑が利益をもたらす商品であると確信しているからという記事になった。『モーニング・トリビューン』紙(6月17日付)には、J. W. ゲイエッティがサンフランシスコの鈴木商店と潜水夫雇用の採鮑契約をして操業を開始するという記事があり、その後ゲイエッティ兄弟の缶詰会社がサンフランシスコの鈴木商店と結んで器械式潜水による採鮑をしていたとすると、ポイントロボスでのアーレンや小谷兄弟の鮑缶詰会社にとって、ゲイエッティ兄弟とは競争相手となった。

建築家でもあるA. M. アーレン(44歳)は、1903(明治36)年にロサンゼルスのアスコットパーク競馬場建設で忙しかったと思われ、小谷兄弟の経営手腕を高く評価して、鮑缶詰会社の経営は実

質的に任せていた。前年の04（明治35）年3月26日付の『エラ』紙には、野田音三郎がハリー・マルパスと共同してモントレイのキャナリーロウに、「モントレイ・魚類&缶詰会社」を設立したとの記事が掲載された。

『アーレン伝』によると、1904（明治37）年3月、アーレンはカーメル川からサンノゼ・クリークまでの119エーカーの土地を購入し、翌年にはアーレンと小谷源之助がカユコスに2つ目の缶詰工場を設置している。そして、『エラ』紙（5月29日付）に「ポイントロボスの建築家A. M. アーレンがシカゴでの大規模な建築契約を考えており、もし契約が成立すれば、すぐにシカゴに移動して作業を行う予定」との記事があり、引き続き建築家として忙しい日々であり、鮑缶詰会社の経営者であるだけでなく、その後ポイントロボスの土地を生かしてさまざまな仕事に関わっていく。

翌05（明治38）年の12月3日付『サンタクルス・センチネル』紙には、「鮑缶詰工場便り～原料はどこから来るのか」という興味深い記事が掲載されている。内容は「カリフォルニア湾のこちら側の海岸沿いを注意深く調べると、この産業は恒久的な供給と利用可能なものを得ることには、大きいコストが必要であるので成功できないと証明されるでしょう。この点についてスタンフォードのジョーダンに聞いてみてください。モントレイでの失態についてスポルディングとゲイエッティに尋ねてみてください。モントレイの缶詰工場のような失態を生み出すものに市民が苦勞して稼いだお金を投資しないように、私たちの日刊紙よりもむしろあなたが率先して行動すべきなのです」とあった。これに対して12月27日付の同紙には、「ゲイエッティは自信を持っています」との表題をつけ、ゲイエッティ自身が直接、読者の質問に答えた記事である。

そこには「われわれが望むだけの鮑を調達できるという確かな証拠を持っています。また、鮑の缶詰の利益は、このビジネスを成功させるのに十分であることを、私たちと一緒に関心を持つようにする人に示す事実と数字も持っています…若い鮑の急速な成長に関して私が誤った記述をしたと言っています。1897年から8年にかけて、日本の潜水士がカリフォルニア州モントレイの海岸で鮑を採り始めたので、人々はすぐに枯渇するのではないかと心配し、彼らはサリナスの裁判所に呼び出されて、なぜ鮑採りを禁止してはならないかを説明させられました。たまたま日本側は、鮑の産卵から成長するまでの正確な時間を示す証拠を持っていました。その証拠というのは、日本の繁殖場から取り寄せたもので、6インチまでの鮑を展示し、それぞれの魚が成長するのにかかった時間を示し、鮑が1ヶ月に1インチ成長することを人々の納得のいくように証明したのです。日本人は過去7年間、モントレイのカーメル湾とその周辺で採鮑をしています。深海から絶えず入ってくるので、供給は無尽蔵であると私に教えてくれました」と述べている。

このゲイエッティの証言で1897（明治30）年末から翌98（明治31）年当初に日本人漁師の採鮑業がモントレイの海岸で始まったとわかり、1898（明治31）年から7年間、モントレイのカーメル湾深海で採鮑業をおこなっていると確認できる重要な証言であった。さらに「サリナスの裁判所に呼び出されて、なぜ鮑採りを禁止してはならないかを説明させられました。たまたま日本側は、鮑の産卵から成長するまでの正確な時間を示す証拠を持っていました。」という部分は、前述したように、日本人採鮑業者が調査研究に裏付けられた科学的な陳述を後になっても評価していた。このことは再度強調するが、ゲイエッティ自身も日本の鮑研究に目を通し岸上鎌吉論文や農商務省水産調査所の『水産調査報告』など最新の調査研究文献をみていた可能性があり、陳述書や寄稿文を書ける小谷仲治郎を知っていたと推察する。